西宮歴史調査団通信 2015年４月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

西宮歴史調査団 10年目に突入！

活動報告会も終わり、平成26年度も無事に一年の活動を終えることが出来ました。そして、今日からいよいよ平成27年度の活動が始まります。平成27年度は新たに「竜吐水班」も加わり、４班での活動となります。

平成18年（2006年）に発足して以来、ついに10年目に突入です！

「市民が主体となって、指定文化財には指定されていないが、市内に残る貴重な歴史資料を悉皆調査し、後世に残していこう!!」と発足して９年。長かったようで、あっという間だった気がします。

しかし、この９年間で、西宮歴史調査団・調査報告書第１集『甲山八十八ヶ所』と第２集『西宮の地蔵』を刊行し、現地見学会やパネル展示、活動報告会、北口図書館での講座など様々な行事を開催しました。また、通信や西宮歴史調査団ニュース１号、２号なども発行しました。

昨年度の初めにも書きましたが、文化財を守り、活かし、伝えていくには資料館員の力だけでは小さく、市民一人一人の力がとても重要なのです。そのため、他の博物館からも西宮歴史調査団の活動は大きく注目されており、今後の活動への期待も高まっています。

今年も地道な作業が続きますが「未知の文化財が未調査のままで失われるということがないように頑張ろう!!」を合い言葉に、10年目も一緒に調査してくださると嬉しいです。

そして、今年度か来年度には「10年目を記念して何かできたら…」と考えていますので、皆様のご意見・ご協力をお待ちしています。

（文責・細木ひとみ）

橋梁班　高橋さんの発表

石造物班　荒木さんの発表

古文書班　藤田さんの発表

編集・衣笠周司（古文書班）

西宮歴史調査団通信 2015年 5月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 TEL. 0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

文化財紹介

神園古墳群第1号墳――史跡整備が完了

今回は平成26年度に史跡整備が完了した「神園古墳群第1号墳」を紹介します。

1 神園古墳群

西宮市神園町にある神園古墳群は7世紀頃に築造された古墳群で、現在は3基の古墳の存在が確認されています。

第1号墳はかつては「夙川学院構内古墳」の名前で呼ばれていました。第1号墳は夙川学院のグラウンド整備で見つかり、発掘調査の後、移築されています。その後、第2号墳と第3号墳が見つかり、古墳群として認識されました。第2号墳は水田の下から見つかり、現在も地中に現地保存されています。第3号墳は宅地の建設工事中に見つかり発掘調査の後、記録保存されました。

右＝ただいま調査中　下＝石室

2 神園古墳群第1号墳

7.9mの横穴式石室

神園古墳群第1号墳は昭和43年（1968年）に夙川学院の補助グラウンドの整備中に発見された古墳で、標高約35mの丘陵上に立地していました。発見時には、既に墳丘が著しく削平されていましたが、石室の石組みが確認されたため、古墳の不時発見となりました。古墳がグラウンドのほぼ中央付近にあったため、現地での保存が困難となり、兵庫県教育委員会と夙川学院により、発掘調査が実施されました。

発掘調査により、以下のことが明らかになりました。①墳丘が削平されていたため、古墳の規模は不明。②石室は全長約7・9mの横穴式石室である。③石室床面に20cm程度の扁平な石が敷かれていた。④石室内から出土した土器などから7世紀に築造された古墳である。発掘調査の後、グラウンドの北西端に古墳は移築されました。詳細は本日現地で解説します。

玄室の敷石

3 古墳の史跡整備

見学が可能になりました

神園古墳群第1号墳は、夙川学院の移転に際して、夙川学院より西宮市に寄付がなされたことを契機に、史跡見学可能な状況に整備しました。西宮市では、平成19年に五ヶ山古墳群第2号墳、平成23年に老松古墳、平成24年に五ヶ山西1号墳の史跡整備を行っており、神園古墳群第1号墳は4例目になります。

（森下真企）

【参考文献・写真引用】兵庫県社会文化協会、1971年、『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集(pp59.60.62)

編集・衣笠周司（古文書班）

西宮歴史調査団通信 2015年6月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 Tel. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

ただいま 活動中 です！ 歴史調査団 自己紹介①

（順不同）

或る想いで ―― 新井粂一郎

一九五〇年四月。私は市内中・高校六年制の私立学校に入学しました。その時、社会科の担任が高井悌三郎先生でした。この方は、定年退職後、辰馬考古資料館の初代館長を永らく務められました。先生の授業はユニークで、当時の新制中学校の教科書を一切用いられず、一年生の時は柳田國男の民俗学を基本にした日本の伝統行事等のお話でした。

二年生では、当時の月刊文春の「ソ連経済五年計画」や米国ルーズベルトが指導した「TVA」のお話でした。三年生になると、リーダースダイジェストで連載されていた「マヂェラン航海記」を手本に当時の世界情勢をお話しされました。試験は、いつも一つか二つの題目のレポート形式で、私などは大変らくでした。高校三年間は、流石にみっちりと縄文時代から広島・長崎の原爆投下まで授業で鍛えられました。

さて、私の特に印象に残るのは、普通の授業以外のことです。中学二年生の春でした。市内越水浄水場見学の帰り道、有志だけ集って先生につれられて、城山町辺りの山畑で弥生時代の土錘の採集です。この一帯は弥生時代の遺跡として以前より注目されている場所です。当時、現在の越水・西田両町附近まで入江になっていて、人々は盛んに漁業を行っていたと説明をうけました。又、ある日曜日、有志のみ先生に引率されて、奈良の薬師寺、唐招提寺、宝来山古墳（垂仁天皇陵）を見学しました。薬師寺では、白鳳期の名宝薬師如来三尊像、聖観音菩薩立像、唐招提寺の金堂或いは四世紀前期古墳時代の大王墓の一つなどを見学して、特に印象に残っているのは、二つの寺院で古寺巡礼の面白さを堪能したことです。又薬師寺では、あの高名な故・高田好胤師の若き颯そうとした青年僧の姿、師は我々を境内の空き地に集めて、そこいらの棒切れを拾って古代寺院の伽藍配置図を法隆寺、薬師寺、四天王寺を例として図示されて説明をうけました。そのシーンを今も忘れません。

高井先生は、一九五五年頃郷土史研究家として有名な故・田岡香逸氏、母校の世界史の教師故・宮川秀一先生（退職後大手前大学教授）計三名で「甲陽史学会」を設立され、それが現在母校地歴部に引き継がれている次第です。当会員には、私の他に、調査団員の荒木知氏も参加されています。

最後に、幾十年も昔の少年時代、高井先生はじめ数々の立派な先生方に巡り会い、私を歴史の面白さ、いや「歴史学」の入口に導いて下さったことに心から感謝するこの頃です。

（石造物班）

田近野に思う ―― 荒木　知

郵便局でバイトをしていた時、受持ちの段上仁川地区の中に尼崎市西昆陽字田近野があった。他市なのに何故かと調べた。１５１０年頃の武庫川の洪水で田近村が全村流失、村民は対岸の西昆陽に移住、田近氏を名乗り、庄屋だった事。甲東の農業用水百閒樋は田近野を通っており、昔から西昆陽に酒肴を贈っていた事等が判った。

これは母方の祖、豊後岡(大分県竹田市)藩士田近氏の本貫ではと調べた。１５６８年に茨木の中川清秀に仕えた田近長祐は白井河原、山崎合戦に従軍。賤ヶ岳での清秀憤死後、長男秀政の三木移封に従う。文禄役での秀政暴走死後、岡への左遷を条件に弟秀成の相続を認めてもらった。九州版関ヶ原では長祐等が討死した事により、西軍加担の嫌疑を晴らし、中川家の社稷を守った。

母が門戸に嫁ぎ、田近氏が甲東入りしたが、平左衛門新田との交換により、田近野が西宮市甲東地区に編入されたのは１９６９年で田近村崩壊より、実に4世紀半後の事である。

（石造物班・古文書班・竜吐水班）

歴史の足跡残したい ―― 石田規矩子

昨日（※6月1日のこと）、身体にひびく地震を感じ、20年前の震災を思い出した。一瞬の悪夢の如く、我が家は倒壊した。

救われた我が身ひとつで生きのび、失ったいとおしい郷土へ戻ってきた。深い考えがあったわけではないが、帰らぬものへの手ごたえが欲しかった。

今期は西宮神社を調査する石造物班に末席をおいた。そこで、改めて、震災の被害の大きさを実感した。かつては空襲で神社まるごと壊滅し、その後復元したにもかかわらず、またしても震災による石造物の倒壊、損傷は言葉につくせないものがある。風雪による変化ではない。その痛ましい姿を無念に終わらせるのではなく、復元し、保存していく為にも現存の姿を書きとめ、歴史のあしあとを残していきたい。

（石造物班）

大切な温故知新 ―― 井上太刀夫

初めまして、井上太刀夫と申します。名字は至って平凡ですが、名前は文化財的価値のある（？）珍しいものと思っています。実は、今年一月末に滋賀県から転居して参りましたが、ルーツはここ兵庫県ですので、久しぶりに故郷に帰って来た感がします。

三月末に、北口図書館で「西宮歴史調査団の成果」の発表会に接し、西宮の歴史に興味を持ち、この度、石造物班と古文書班に入班させて頂きました。

「歴史とは、現在と過去の対話である」という言葉がありますが、「いま」を知るために過去を知る。正に温故知新で先人の歩いてきた道を知ることが大切だと思います。

西宮市は「文教住宅都市宣言」をされただけあって、いろいろな文化活動が盛んな街だと感心しております。大阪と神戸の丁度中間にあり、お互いに文化的刺激を受けられる場所だと思います。今後とも、ご指導よろしくお願い申し上げます。

（石造物班・古文書班）

路傍で思わず合掌 ―― 粟野光一

郷土資料館の歴史調査団発足当時から末席に名を連ねています。

当初は地蔵班に所属し、主に旧西宮町を中心に国道2号の南方面と、阪急電車今津線の西方面、つまり旧今津村の一部地域を対象に、祀られている地蔵尊を探し求め、路地から路地を隈無く歩き回り記録を取りました。

それが性となり、今でも路傍であれ祠の中であれ地蔵尊を見つけると、しげしげと見入り手を合わせている自分に苦笑する事頻りです。

地蔵班の調査が概ね終了した後に石造物班に所属し、今年度で5年になり西宮神社の一部区域の調査を続けています。

地蔵尊と比較すると対象物が比較的相似形で、殆どに銘が刻まれているのが大きな特徴だと思います。それらの石造物は祈願のため、或いは祈願成就の感謝のため、信仰をして財を成したので奉納された物などなど、銘を見ることにより寄進者のさまざまな気持ちを汲み取ることが出来ます。

ともあれ、現在調査中対象物の記録を早急に完了せねばと焦っている今日この頃です。

（石造物班）

編集・衣笠周司（古文書班）

西宮歴史調査団通信 2015年7月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 Tel. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

歴史調査団 自己紹介②（順不同）

自己紹介 ┃┃┃┃ 川上 早苗

西宮で生まれ育ち、子供のころから歴史は好きで大学でも日本史を勉強しましたが京都や奈良など関心は外を向いていました。

ただちょうど生活に時間が出来たころに偶然見たケーブルテレビで調査団の紹介があって、地元を知ることもなんだかおもしろそうだと思って2年目から参加しています。

同時期に、博物館の展示の古文書がすこしでも読めるようになったらいいなと思ってカルチャースクールの古文書教室にも通いだしたのですが、石造物班で燈籠などの銘文を読む手助けになりましたし、現在は古文書班での調査にとても役に立っています。

それでもまだまだ知らないことは多いから新しい発見はおもしろいし、宗門帳をただひたすら書き写していくことも楽しんでいます。期待しています。（古文書班）

歴史調査団を楽しむ ━・━・━ 倉田 克彦

長年の勤めを終えた頃、「日本の歴史」と名のつくものは、受験科目としての「日本史」が頭の片隅に残るだけで、少し勉強してみるかと思い始めた。また、旅先の城や博物館で古文書を見る度に、これをすらすらと読めたらなとも思っていた。

そこで先ずは古文書からと、通信講座に挑み出したところで、歴史調査団のことを知り、早速に出向いた次第である。

橋梁班では、古い地誌で昔の橋を、今の橋は足を頼りに調べ、これまで足を向ける事がなかった山口、船坂、生瀬、名塩へも出向き、身近な生活圏に限られていた「我が町西宮」が幾分か拡がったようである。

次に、古文書に直接触れて「習うより慣れろ」だと、意気込んで古文書班に参加したが、昔の人の「くずし字」は一筋縄ではいかなかった。通信講座と違って正解はこれと示されないので、四苦八苦している。

ともあれ、橋や古文書を相手に、歴史の断片を切り取り、知るという面白さを楽しみながら続けていきたい。（橋梁班・古文書班）

@rekishityousadan.com

雑　感 ━・━・━ 梅木 弘道

歴史調査団には長年参加させて頂き有難うございます。幼い頃からの西宮育ちですが、サラリーマン時代に二〇数年間高槻に転居していました。当時の高槻は駅から少し離れると牛小屋も有る長閑なところで通勤途中にある西国街道、芥川の一里塚あたりにも街道の雰囲気が感じられました。また、近くには現在継体天皇陵ともいわれる今城塚古墳もあり、その周囲の濠は野池の様子で地元の人たちが釣り場を作り、鮒つりをして楽しんだものでした。今は整備されて当時の面影はありません。

現在の高槻は駅も大きくなり、駅前には近代的なビルが建ち並び、当時には想像つかない大都会に変身しています。

西宮に戻って暫くして、郷土資料館が歴史調査団員を募集して西国街道の調査を始めることを知り、素人ながら興味を持ち入団したのが始まりです。街道の調査では、その時代のニーズに合わせてどんどん変遷しており、今となっては推測するしかないところも多いことを知りました。最近では、西宮でも阪神大震災のあとの区画整理等で街が変化していますが、その前の様子はすぐに忘れていきます。

街道調査班が終了して、現在石造物班に所属しています。石造物でも、調査中に移動された燈籠がありました。色々と変化していくこともあるので、地道に石造物を調べて記録を続けています。

今後ともご指導よろしくお願いいたします。（石造物班）

これからが始まり ┃┃┃ 小西 貞一郎

昔から歴史が好きでした。好きなだけで、何の活動も、歴史の本を紐解くこともしていませんでした。平成二十三年に定年退職の年を迎え、何か歴史に関することをしたいと考えていたところその切っ掛けとなる歴史調査団入会の案内を家内が見つけ、説明会に参加し、入団を決めました。

現在担当している橋梁の悉皆調査の後は古い橋、興味のある橋に関わる様々な歴史を調査したいと考えています。現在の橋はほとんどが鉄筋コンクリート製ですが、最初の橋はどんな形状していたのか、なぜこの名前が付けられたのか、その土地との関わり等々、私にとってこれからが本格的な橋の歴史調査のはじまりです。（橋梁班）

半鐘を鳴らせ！ ┃┃┃┃ 衣笠 周司

「火事だ！」

そのとき、まだ小学生だった私が、一生懸命、半鐘を鳴らしていた。

その半鐘は、故郷の村役場の2階の庇に吊り下げられていた。

火事が発生し、村の若い衆が半鐘を鳴らし始めたのだが「誰か叩くのを代わってくれ。ワシも出動せんならん」という。

近くにいたボクは役場の2階へ駆け上がり、半鐘叩きを引き継いだというわけだ。

「カンカン　カンカン」

火事は隣の集落だった。だから2点連打で鳴らす。自分の集落だったら「カンカンカンカン」と連続の乱打となる。

いつも遊んでいる悪ガキ共が、いつの間にか役場に集まってきて、うらやましそうに見上げている。

半鐘を鳴らすなんて体験は一生に一度あるかないかだ。ボクは得意満面で鳴らし続けたのをいまだに忘れられない。

半鐘を叩く槌が行方不明で渡されたのはこぶし大の石ころ。それが槌代わりだった。あれ、半鐘にヒビが入っている？　ボクが力いっぱい石で叩いたせいではなく、以前からだったと固く信じている。

竜吐水班で火の見櫓の話などを聞くと、もう一度半鐘を鳴らしてみたくてうずうずするが、活動にヒビの入るようなことがあってはならないと心を諌めている。（橋梁班・古文書班・竜吐水班）

編集・衣笠周司（古文書班）

西宮歴史調査団通信 2015年 8月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 TEL. 0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

阪神沿線ごあんない ~にしのみやの郊外生活~

阪神沿線の文化110年展

阪神電鉄が大阪出入橋―神戸三宮間の開業を始めて今年で110年を迎えました。これを記念して、阪神間の美術館・博物館等7機関が合同で「阪神沿線の文化110年展」を開催することとなりました。

3月の「大谷崎展」（芦屋市谷崎潤一郎記念館）を皮切りにスタートした展覧会は、それぞれ、歴史・文化・美術・ファッションなど館や地域の特徴をいかして開催してきましたが、当館の会期期間をもって終了となります。

当館の展覧会は、第31回特別展示「阪神沿線ごあんない―にしのみやの郊外生活―」（西宮市制施行90周年記念事業）と題して、阪神電鉄の敷設に伴って近代化の歩みを進める西宮について、ポスター・絵葉書・パンフレット等の広告物、阪神電鉄開業前の歴史資料、市制施行や近隣町村との合併に関する公文書など300点あまりの実物資料で紹介しています。

西宮市鳥瞰図

「西宮市鳥瞰図」を15年ぶりに展示！

今回是非観ていただきたいのは、吉田初三郎筆による西宮市鳥瞰図です。タテ1・1㍍、ヨコ3・85㍍もある絹本著色の絵画は、15年ぶりの展示となります。昭和11年に製作されたこの絵画は、西宮市が今津町・芝村・大社村を合併した後の市勢について、全国の観光案内地図を製作していた吉田に依頼したものです。東西に走る阪神・省線・阪急（今津線は南北）の鉄道網、近代産業の工場・近代建築が建ちならび、一見にして西宮市勢がわかります。

この資料は、美術運搬の専門業者の作業員が6人がかりで展示しました。次に展示できるのはいつになるか分かりません。オペラグラスも用意しましたので、ゆっくりとご観覧ください。

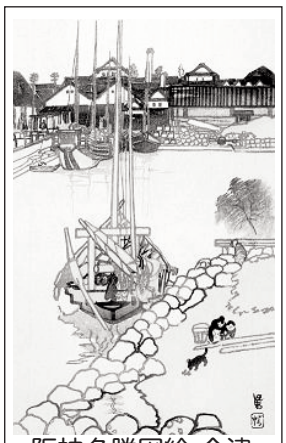
もうひとつ観ていただきたいのは、門戸厄神東光寺資料館からお借りした中島成教氏文書です。阪神は、明治26年に設立した神阪電気鉄道株式会社からスタートしました。当時は、各地で電鉄会社が設立され敷設の申請が行われていました。阪神も他の電鉄会社と合併して明治32年に現在の社名となりました。中島さんは神阪電気鉄道株式会社の経営者の一人であったため、合併に関する契約書（案）や株主会等の配付資料などが残されていたのです。開業前の淀川鉄橋写真や開業1周年を迎えた出入橋停留場・神戸停留場の写真は大変貴重ですので、是非ご覧いただきたいと思います。

なぜ門戸村の中島家が阪神電鉄の経営に関わったのかというと、成教さんが辰馬吉左衛門さん（辰馬本家酒造株式会社＝白鹿）の三男で、辰馬家の電鉄事業を担ったのが成教さんだったからです。浜町に残る旧辰馬喜十郎住宅の喜十郎さんとはご兄弟という関係でした。

幼少期に代官を務めた名家中島家に養子に入った成教さんは、辰馬家が神戸で経営していたマッチ工場経営を取り仕切るなど実業家としての手腕を発揮しました。

中島家は、昭和のはじめには阪神の経営から退きました。

阪神名勝図絵 香櫨園



阪神名勝図絵 今津

「中島家文書」も必見

懐かしいポスターも

このほか、懐かしい駅貼り・車内吊のポスターやパンフレットなど多数展示しています。是非ご家族一緒に阪神電鉄や市内での思い出を語りにご来館いただけたらと思います。

なお共同展では、「まちと文化の110年」という共通図録も発行しました。あわせてお手にとっていただけると幸いです。（俵谷 和子）

編集・衣笠周司（古文書班）

西宮歴史調査団通信 2015年 9月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 Tel. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

歴史調査団 自己紹介③（順不同）

陰で支えます　小西 佳陽子

主人が歴史調査団の橋梁班に平成二十三年から参加することになり、車の運転や記録係として主人の手助けの為に私も橋梁班に入れて頂きました。

その後、古文書班に自ら進んで入りましたが体調を崩してしまい、自らの活動は諦めざるを得なくなりました。然しながら主人の橋梁調査の補助役はこれからも続けていきたいと思っています。

（橋梁班）

西宮市鳥瞰図で見つけた　清水 貞夫

現住地、鳴尾池開に住んで五十年になる。生まれたのは今津だが空襲で焼け出され、いまの処の北側、小松に転居している。そのようなわけで、鳴尾の地には何となく愛着がある。鳴尾の東側を武庫川が流れており、子供の頃から親しんできたものである。

その武庫川のある場所が、以前から気になっていた。そこは国道四十三号線の橋がある南側で、堤防上の道に登る長い坂道が西側から百米ほどつづく。堤防の上は丁字路で、その先は土堤を下り河川敷となる。

対岸の尼崎側にも同じような坂道があるのは早くから知っており、おそらく昔はこの地点に橋が架かっていたものと推測し、ずっと気になっていた。

ところが先日、郷土資料館で、吉田初三郎が描く西宮市鳥瞰図を見て、武庫川の気になっている場所に木橋が描かれているのを見付けた。この図のことは印刷物で知っていたが、図版が小さいので気が付かなかったようである。描かれたのは昭和十一年とある。

歴史調査団の橋梁班に加わって活動をしてきたが、今年は体調不良もあって野外での調査活動は出来ていない。たまたま鳥瞰図を見る機会にめぐまれたのは、活動をつづけてきた余得かと思えてならない。これから、この橋の名前や、架橋された経緯などがわかればと楽しみになってきた。

（橋梁班）

欲張って学んでいこう　清水 洋子

私は神奈川出身、湘南というには海から遠すぎる藤沢市北部で育ち、その後もほぼ県内で過ごして来ました。

実家から車で十数分の距離に相模国一之宮の寒川神社があり、毎年元旦には初詣をして八方除のお札を頂いていました。結婚後、夫の実家に近い同国二宮の川匂神社にお参りするようになり、新たなご縁ができました。実は、かつてこの二社は相模国成立に際し一宮の座を争ったことがあり、それが国府祭の「座問答」の儀式として今も伝えられています。二社の宮司が虎の皮を使って各々優位を示して争い、三之宮である比々多神社が「いずれ明年まで」と諌めて終わるそうです。

私はこの身近な神社に関する儀式を実際に見たことがありません。西宮に転入後、西宮のことを一から学んでいると、自分を育んだ地域で見過ごした事の多さを痛感します。調査団での活動は、このような気付きもくれる大切な機会です。あれこれ欲張って学んでいこうと思います。

（古文書班）

ミステリアスな2時間　須藤 久美

我が町内には昔からお地蔵さんが在り、自治会でお世話しています。一昨年にこのお地蔵さんを調査にきた方があり、その方からお地蔵さんの本を貸して頂きました。この本にはお地蔵さんの見方や名称などが詳しく書かれていました。市内にはお地蔵さんがたくさんあることもわかり、役員一同、感動してじっくりとお顔を拝見。その感動を皆さんにも感じて貰いたいと、地域の長老に筆書きして頂き、お地蔵さん前に説明板を立てました。ちょうど子ども達の道草場になっているので、ふりがな付きにして子ども達にも読めるようにしました。

これをきっかけに郷土資料館に興味を持ち、郷土資料館の発表会に出会い、古文書班に入りました。チンプンカンプンで皆さんに教えて頂きながらですが、これが面白いのです！　超スローペースながら、わからないことが解ける快感に浸り、古文書のミステリアスな2時間にワクワクとし、脳を活性化（？）しています。よろしく。

（古文書班）

夢だけはでっかく！　高谷 康彦

私が歴史調査へのコンピュータ利用に興味をもったのはコンピュータ関連の仕事をしていたこともありますが、20年近く以前にNHKの宇宙の大規模構造についての番組で、地球から各銀河(団)への距離を測り、それを3次元座標にプロットしていくと、それらは泡の表面上に位置しているよう（バブル宇宙論）になっているのがわかったとディスプレー上で上下左右から見ている状態を作り出しているのを見たのがきっかけです。距離を一覧表にしただけでは理解しづらいことをディスプレー上の3次元空間で可視化することで理解しやすくなると実感しました。

今、古文書班では宗門帳をひたすら読んでエクセルに入力していますが、個人的には、その結果をいろんな形で集計したり、地図上にプロットしてみたり、原本と翻刻文を並べて表示してみたり、字書や用語集を作ってみたりとパソコンを利用してのいろんな試みをして、考えるための材料を集めることで、面白いことが出来たり、わかったりしないだろうかと夢のようなことを考えています。

（古文書班）

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2015年 10月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 Tel. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

歴史調査団 自己紹介④

（順不同）

26回目の転居地、西宮を知りたく～ 高橋　博己

この世に生を受けて以来、国内外各地を幾度となく引っ越し、平成19年3月に初めて西宮に移り住んだ。多分ここが終の棲家になるだろうから、この地についてしっかりと学ぼうと歴史調査団に参加しました。地蔵の悉皆調査ならば、市内の彼方此方を訪ねられると考えたのです。そうして訪れた地で出会った人々の助けや知恵を拝借しながら、地蔵の由来や地蔵盆の調査を何とか終え、人々との交流の結晶が調査報告書『西宮の地蔵』となりました。

平成23年度からは橋梁班に加わり津門川に架かる橋、その後富倉川や名塩川などと調査地区が広がりました。地蔵調査と橋梁調査に参加した結果、市内北部の北六甲台から、武田尾、名塩、生瀬と、南は鳴尾浜まで市内各地を転々と歩き回りました。西宮市全域の地理的状況は大凡理解したと思います。次は橋を足掛かりに、その街の歴史に辿り着ければと願っています。（橋梁班）

一「誤」一会　多々良　さゆり

嘉永5年（1852）宗門帳に「川上金吾助御代官」という名前が出てきた。「きんごすけ～??」なんだか代官ぽくないモッサリした変な名前が気になって、ググッて見たらなんと神様になっていた。

1854年大飢饉の時に年貢の減免を行い、村を救った生き神様としてあがめられ、神戸の池ノ宮神社に川上大明神として祀られたというのだ。この神社は、須磨の板宿八幡神社に合祀されて、そこに川上大明神の祠が今もある。金吾助さんに会いたかったら是非どうぞ。

他にも、ネット上には信州勤務時代1847年大地震があった時に、幕府に色々報告した人としても名前が登場する。名前に似合わず実に有能そうで良い人そうだ。御代官様ってお百姓さんの敵じゃ無かったのか。

この「きんごすけ」さん以来、御代官様が気になって、天保13年（1842）の宗門帳に出てきた竹垣三右衛門さんもググッて見たら、この人の日記「大阪代官竹垣直道日記」がネット上で公開されていた。一巻の後ろの方が丁度天保13年だ。拾い読みしてみると、「役人共為振舞来ル」なんて楽しそうな記述もあるけれど、ちゃんと仕事しているお父さんという感じだ。6月の出張中、久保町でお弁当を食べている。

「○○屋、おまえも悪じゃの～」なんて時代劇では悪人係数マックスな御代官様だが、実際はほとんどの人が有能でまじめな官僚だったのかもしれない。

それにしても金吾助さん「金吾之助」とも表記されていた。そうか「きんごのすけ」って読むのか。一音入れるだけで全然普通っぽい名前になってしまった…。もし「きんごのすけ」って最初に読んでいたら、たぶん調べなかっただろうな。（古文書班・竜吐水班）

一枚の毛筆の手紙から　野上　千章

他市に住み五十路を過ぎて、振り返ると生まれ育った西宮のことを何一つ知らないことに気がつきました。阪神・淡路大震災で街も家もご近所もすっかり様子が変わり、小さい頃うちにあった懐かしい思い出の品も建物ごと全部なくなってしまいました。昔のことを教えてもらえる人もいなくなってしまいました。

被災した表紙もない泥まみれの本の間に一枚の手紙を見つけました。遠い昔に家の誰かが書いた毛筆の文字でしたが、同じ日本語なのに全く読めませんでした。くずし字辞典を買ってみても歯が立ちません。地元の図書館で郷土資料館のことを教えてもらい、訪ねたところ、学芸員の方が読み方を教えてくださいました。とてもうれしくて、ずっと昔に生きて暮らしていた人々が何を思って書きとめたのか、年を隔てた今それを知ることができたらいいなと、古文書が読めるようになりたいなと思いました。（竜吐水班）

私の先祖　福冨　正俊

私の家に、私が古文書に興味を持つきっかけとなった父方の先祖書差出書があり、私より十一代前まで辿れます。

一番古いのは江戸時代初期に高知の唐人町に住んでいた浪人東助左衛門という人で、その孫が百人並郷士株を買い、郷士となり「福富」と名乗りましたが、その孫がお金に困ったのでしょう、その郷士株を売ってしまい苗字がなくなってしまいました。

しかし、その息子が高知城追手門の門番を勤め、さらにその息子が土佐藩の下横目（警察機構の一番下っぱ）を長年勤めたので苗字を許され、福富姓が復活しました。

戦国時代、長宗我部氏の家来に有名な福富一族（ほとんど戦死）があり、江戸時代初期に東姓の浪人であったのは、福富姓を名乗ると長宗我部氏の家来であったのがわかって、まずいので名前を変えたのではないかと勝手に推測していますが、その一族との繋がりが解明できれば嬉しいなと思っています。

又、母方の方では驚きの武将に辿り着きますが、これはまた別の機会に。（古文書班）

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2015年11月号

発行　西宮歴史調査団　西宮市立郷土資料館内 ＝ 662-0944　西宮市川添町15-26　TEL0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

指定文化財公開展　今年は「高畑町遺跡出土木製品」

森下　真企

文化庁が文化財保護強調週間として位置づけている十一月一日～十一月六日には、文化財に親しむことを目的として、文化財の保護や活用に関連する様々な事業を文化財の所有者や全国各地の自治体がおこなっています。西宮市では、例年この文化財保護強調週間にあわせて、指定文化財公開を目的とした展示を開催しており、今年度は、平成二十六年十一月十二日に西宮市指定重要有形文化財となった「高畑町遺跡出土木製品」を取り上げています。

高畑町遺跡出土木製品は、保存状況が良好であったこと、一括して多種多様な木製品が出土したこと、発掘調査による一次資料であることなどから、保存処理をおえた資料の一部は「高畑町遺跡出土木製品ー附奈良、平安時代大型井戸出土遺物ー」として、西宮市指定文化財となりました。資料数は、三十八点、附三十四点の合計七十二点です。今回の通信では、これらの中から、「曲物」（まげもの）を紹介したいと思います。

曲物はヒノキやスギなどの薄い板を円形、楕円形、方形、長方形の筒状に曲げて、その合わせ目にサクラ、カバの皮で縫い合わせることで側板とし、底板を取り付けて容器としたものです。側板の内面には細かい刻線が確認できます。これは、側板を曲げ易くするために刻まれたもので、さらに熱湯に漬けることで側板を割ることなく曲げることができます。

底板には、「くれ底」と「かきいれ底」があります。くれ底は、底板を側板の内に納めるもので、かきいれ底は、側板より大きな円形の板に随所に穴をあけて樹皮やツルで側板を底板に綴じ付けたもの、あるいは、底板の内側を厚くし、側板に接する部分から外側を薄くすることで底板が側板に納まるようにしたものです。底板と側板はカバで結びつけるもの、木釘で打ち留めるもの、カバと木釘を併用するものがあります。

今回展示している高畑町遺跡から出土した曲物は、いずれも井戸の枠として使用されていました（左の写真参照）。展示資料の曲物はどのようになっているのか、観察してみてください。

平成二十七年度指定文化財公開「高畑町遺跡出土木製品」は、十一月三日（火）から十一月二十九日（日）まで開催。午前十時～午後五時開館。入館無料。月曜休館。

指定ホヤホヤの文化財！ 旧西宮スタジアム周辺の地下から発見

←鎌倉時代の井戸

←平安時代の井戸（中に曲物）

★曲物の底を抜き、複数個重ねて井戸枠として転用しています。

西宮歴史調査団通信 2015年 12月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 Tel. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

きっかけは奇妙な三叉路　曲江　三郎

旧国道を今津から西宮神社方向に歩くと、福祉センター筋と交差するところで鋭い角度で2つに道が分かれる。左の道は本町筋を通り赤門に達する。人も車も基本的にこちらに進む。一方、右の道は東川を渡ったところで今は途切れ、先に進むことはできない。超変則的な細長い三角形の土地にもかかわらず、分岐点にはタバコ屋兼喫茶店が建っている。どう考えてもなんらかの理由で無理矢理このような形になったとしか思えない。

あるときふと推測してみた。左の道が本来の道であるなら、わざわざ行き止まりになるような右の道を追加する必要はないはずだ。つまり、右が本来の道で左は後に作られた新道なのではないか。考えただけならそのまま終わったのだろうが、性分というものはどうしようもなく、確かめたくなった。

はたして、右は江戸時代以来の街道に由来することと、この道は東川を越えたところで急激に細くなっており、軍隊の大砲が通らないという理由で大正時代に先ほどの分岐点から本町筋まで直線道路を新設したことを知り、自分の推測が正しかったことが分かった。

これが良かったのか悪かったのか、これ以来約10年、いまだにこんなことばかりやっている。

（橋梁班）

歴史調査団　自己紹介⑤

（順不同）

自己紹介　益田　健司

国民学校へ入学し小学校を卒業した年代です。幼時より社寺行事に参加し、年配の人から昔は云々と聞かされ、又、町村の変移についても終戦、戦後を経て歴史を感じ、関心をもつようになりました。

縁あって昭和四十一年より西宮に居住しておりますが、勤務の都合もあり、地域活動にはあまり参加しておりませんでした。が、勤務より解放されて、改めて地域の歴史、先人の足跡をたどって、知ることより始めて将来につなげて行きたい、と思い、活動に参加させていただいております。

無為徒食、酔生夢死から半歩でも遠退きたいと念じております。

（石造物班）

西宮市下大市東町の永福寺で行われた竜吐水の調査（2015.11.10）

大物崩れ　南　好廣

阪神大物駅前に「大物崩れ」の戦跡の碑がある。調べると、応仁の乱の後、管領細川氏の専制が確立するが、後、家督争いの内紛が起こり内戦状態となる。信長登場以前の畿内の戦国史である。

『西宮市史』によると、西摂の国侍、河原林（瓦林）政頼は越水城に拠り、細川高国に与したとある。越水の交差点の北に城山町の地名がある。以前から気になっていた。歩いてみると、大社小学校の前に「越水城趾」の碑があるではないか。阪神間（西宮）の歴史に興味を持ったきっかけである。

（古文書班）

神戸市立博物館の場合 4　横山　忠範

◆「西宮歴史調査団通信」2014年12月号より続く

二〇〇九年十月からは早速、第二期交流員初のオリジナル作品となる、新規ツールの立案に入りました。しかし、これを使うワークショップ実施が翌年1月末、実際の企画・制作期間は三ヶ月足らずという日程で（自分だけ反対したのですが）、他メンバーの熱意に驚かされたのを覚えています。

まず主題は先述の四大テーマより〝南蛮美術〟を選び、それに沿った学習ツール作業の意義などについて議論のうえ、モチーフとする当館所蔵品には私の案を採り「都の南蛮寺図」（狩野宗秀筆）が決定、この扇面画に着想して南蛮風の扇子作りが提案され、教材メーカーから取り寄せた組立キットでサンプルを試作、次いで絵柄の表現方法について検討し、館所蔵の重要文化財「南蛮屏風」（狩野内膳筆）の各部描写に取材したスタンプを交流員側で考案、子供たちが自由に組み合わせて押捺、色鉛筆で着色できるものとしました。

（古文書班）

（次回へ続く）

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 1月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 TEL. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

文化財調査

報告書用の写真の撮り方――意見を交換しながら撮影を

12月の定例会では、昨年に引き続き、文化財調査においての写真撮影についてお話させていただきました。昨年は、実際に写真撮影するときの注意をお話しましたが、今年は報告書に掲載する写真について、少し詳しく踏み込んだ話になりました。

報告書に載せる写真は、研究者のみならず、市民の方々にも見ていただく機会があります。その方々にも正しく情報を読み取ることができ、どういう文化財なのかがよくわかる写真が、報告書に掲載できる写真となります。そのため、「その被写体の文化財をどう撮影したら、市民にもよく分かる写真になるのか」を考えて撮影していくことが、非常に重要になります。

自分だけによく分かる写真は、メモ写真となってしまうことがあります。調査員の方々は学芸員といろいろと意見交換を行いながら、文化財を撮影してみてはいかがでしょうか。

（山田　暁）

↑実際に一石五輪塔を撮る↓

写真撮影時の注意点と報告書写真についての講義

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 2月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26　Tel. 0798-33-1298　FAX 0798-33-1799

郷土資料館展示室では、平成25年度から開始した生瀬地区文化遺産調査の中間報告として、特集展示を開催しています。

第45回 特集展示 まちのきおく

生瀬地区文化遺産調査から

「記憶」が「記録」となる

生瀬地区は、西宮市域の北部に位置し、京・大坂と丹波・但馬・有馬を結ぶ道筋として、多くの旅人が行き交いました。浄橋寺には、国指定重文の本尊阿弥陀如来像をはじめ、浄橋寺文書など市内で最もまとまった点数の指定文化財が所蔵されています。

今回の調査では、古文書・石造物・建造物といった有形の資料だけでなく、地域のみなさんの「記憶」の聞き取りをしています。↘

↘その狙いは、ちょっと昔の写真に写りこんだ路地・溝、お店の看板など、その写真だけ見たのでは「懐かしいねぇ」という感想しかありませんが、「記憶」と写真などを結びつけることで、「記憶」が「記録」となるのです。形あるモノを伴わない記憶を「有形」の記録に変換させようというものです。

地域の方々への聞き取り調査では、古い写真や地図を見てもらいながら話しを聞いたり、お聞きした話に当てはまる写真や地図を探したりしました。また、お聞きした話の場所を地図に落とし込んだりもしました。そうした作業を進めていくと、地図や写真が単なる記録ではなく、そこの場所に、そのころに、暮らしていた人たちの息遣いも感じられる生き生きとしたものに見えてきました。

まちのきおく　路　地

昭和 46 年ごろ

思い出したことを 書きとめてみよう

地域の歴史は、文字で書かれたものだけでなく、多様なもので記録されています。みなさんの記憶は、お住まいの地域の歴史資料でもあるのです。是非この機会に、生まれ育った街や暮らしてきた街と、その街にまつわる記憶をたどってみて下さい。思い出したことを書きとめるなどのちょっとした作業をしてみて下さい。その作業の成果が、街の歴史を紐解くキーワードになることでしょう。

（西尾　嘉美）

「まちのきおく」は１月19日(火)～２月28日(日)。10時-17時・月曜休館

編集・衣笠周司（竜吐水班）

西宮歴史調査団通信 2016年 3月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 Tel. 0798-33-1298 FAX 0798-33-1799

西宮神社 御社用日記

西宮市重要有形文化財に指定 速報

平成28年2月3日〝えべっさん〟こと西宮神社に伝わる「西宮神社御社用日記」が、西宮市重要有形文化財(古文書)に指定されました。

「西宮神社御社用日記」は、明治初期まで西宮・廣田両社の神事を兼務していた神主らが記録した社務日誌の総称です。冊子状の資料で、基本的に1年1冊ずつ作成されました。社務日誌は形式を引き継ぎながら現在も作られているそうですが、今回指定の対象となったのは、最も古い元禄7年（1694）のものから明治8年（1875）までの216点です。

ここで数が合わないと思われた方はご明察。「西宮神社御社用日記」には、大きく分けて2つの系統の日記とそれらに付随する資料が含まれているため、作成年数よりも指定点数が多くなっているのです。

「西宮神社御社用日記」の大部分は、「御社用日記」「御社用日録」といったタイトルが付けられ、西宮における社務や出来事などが記録されている資料です。内容は多岐にわたり、祭礼儀式の様子はもちろん、領主である尼崎藩とのやりとり、境内で起こった事件から賽銭の勘定まで記されています。

次に多いのは「御社用江戸日記」などと称される江戸での活動記録です。西宮・廣田両社の神主は、将軍に謁見し、年頭の挨拶をすることが許されていたため、このような記録が作成されました。

これらの日記に加え、佐渡や阿波といった諸国の巡回記録、台風で倒壊した神楽殿の再建記録など、特定のテーマでつづられた資料があります。

市重要有形文化財に指定された「西宮神社御社用日記」

元禄7年から明治8年まで

さて、以上のような「西宮神社御社用日記」ですが、既に翻刻本があることをご存知でしょうか。現在3巻まで刊行されており、元禄7年から享保13年（1728）までの日記を活字で読むことができます（以下続刊）。

この「西宮神社御社用日記」の翻刻は、西宮歴史調査団の調査に活用できると考えています。

例えば、古文書班が調査している宗旨人別帳からは、西宮町人の年齢や家族構成などが分かりますが、その行動はほとんど分かりません。「西宮神社御社用日記」には西宮町の人物が多数登場しますので、宗旨人別帳に記された人物の活動が分かるかもしれません。また「西宮神社御社用日記」には、西宮商人による寄進の記録もあります。石造物班が蓄積した西宮神社の石造物に関するデータと記述を照合してみると、寄進の理由などが明らかにできるのではないでしょうか。

このように、「西宮神社御社用日記」の研究成果と西宮歴史調査団の調査成果をリンクさせることで、西宮の歴史をより深く理解できると思います。

（笠井　今日子）

★「西宮神社御社用日記」を見たい方へ

現在、西宮神社社務所一階えびす信仰資料展示室で「西宮神社御社用日記展」が開催中です。

指定された216点から7冊、その他近現代の日記4冊が展示されています。4月30日まで、毎日9時から16時まで開催されていますので、興味深い出来事が紹介されていますので、是非ご覧ください。

編集・衣笠周司（竜吐水班）